Message

聖書はずっと手元に置いておきなさい

大学宗教部長
塩谷直也

青山学院で強制的に（？）買わされた聖書を「卒業後も読め」とは言いません。なぜならあなたはこれから多くの場面で、形を変えて聖書を読むからです。聖書、すなわち「福音＝良い知らせ」と思いがけない場所で出会うからです。

俳優の高知東生さんはかつて薬物依存で苦しみ、現在は依存症から立ち直る人々をサポートしています。その彼が著書で語ります。「依存症に完治はありませんが、これは不思議な病気で、回復し続けるためには、同じ依存症に苦しむ仲間達を助けていく必要があるのです。『助けるものが助けられる』そんな原理で回復し続ける病気なのです」（『生き直す　私は一人ではない』より）

この言葉を読み、皆さんの頭の中に聖書の言葉が浮かびませんか？

与えなさい。そうすれば、自分にも与えられる。［ルカによる福音書 6章38節］

あなたがたもこのように労苦して弱い者を助けるように、また、主イエスご自身が『受けるよりは与えるほうが幸い』と言われた言葉を思い出すようにと、私はいつも身をもって示してきました。［使徒言行録 20章35節］

互いに重荷を担いなさい。［ガラテヤの信徒への手紙 6章2節］

高知さんの言葉から、ふと聖句がよみがえるように、たくさんの涙と笑いを経て、忘れていた「良い知らせ」が体の中で響きだします。在学中は

人を助けるどころか、自分のことで精一杯だったでしょう。でも卒業後、自分のことだけを考えていると、どこかで人生の歯車が回らなくなる場面がやってきます。その時、不思議な「良い知らせ」が聖書以外の世界から聞こえます。その世界は私たちに日々教えます。私たちが皆「不思議な病気」にかかっていることを。目の前の現実は、言葉少なに指し示します。私たちが一人残らず「助けるものが助けられる」という原理で生かされているということを。それは他でもない、「地の塩、世の光」を掲げる母校で、あなたが学んだことなのです。

私は目の病で状況に合わせて色つき眼鏡をかけます。その眼鏡をかけた瞬間、世界がその色に染まりますが、やがて慣れると色つき眼鏡をかけていることを忘れます。「良い知らせ」もこれに似ています。「与えなさい。そうすれば、与えられます」とのイエスの言葉に私たちは感激し深く胸に刻むのですが、時間と共にその言葉の大切さを忘れます。

皆さんは青山学院で「良い知らせ」眼鏡を与えられましたが、やがてその眼鏡をかけていること自体を忘れるでしょう。でも人生の節々で、世界が教えてくれます。地球上のすべての人が皆「不思議な病気」に苦しんでおり、「助けるものが助けられる」原理を必要としていることを。その真実にいつでも気づける「良い知らせ」眼鏡を、青山学院から授けられていたことを。さあ、その時あらためて聖書にもう一度帰りましょう。読んでみましょう。私はその日が皆さん全員に訪れると信じる一人です。だから…聖書をずっと、ずっと手元に置いといてくださいね。